

チーム医療における薬剤師の役割

国際医療福祉大学 附属病院薬剤統括部長

土屋 文人

入院患者の薬被害 本格調査

中核3病院、5人に1人

京大など

治療のための薬で健康被害を受けた入院患者が5人に1人になることが東京、京都、福岡の病院を対象にした調査でわかった。軽微な副作用から命にかかわる深刻な例まで計千件以上あった。京都大などの研究グループによると、

間違いを始め、通常の治療の範囲内で、鎮静薬を多量に投与された高齢者の意識レベルが低下したり、消化管出血、アレルギー反応、下痢、腎機能の低下などが起きたりした例も含め「薬剤性有害事象」として集計。投与直後だけで

れる前に薬剤師が点検するなど、医師以外が処方内容を検討すれば防げるものがあるという。

調査担当者が最初に気づいたのが141件中46件、院内報告制度で報告されていたのは19件にとどまった。

森本講師は「薬剤性の有害事象は見逃されやすい。把握

のための一定の基準を作り、

担当薬剤師らが日常的に患者の症状をチェックし、速やかに医師に伝える仕組みを導入すべきだ」と話す。

状が悪化したような明らかな

効能の複数の薬が重複投与さ

1965-

外来患者中心

調剤・製剤・薬品管理
(薬局内での業務が主体)

医薬品情報管理

医療従事者への情報提供

1975-

外来患者中心
(一部新しい業務)

調剤・製剤・薬品管理

調剤に新しい概念導入
患者情報の把握
処方監査
服薬指導

医薬品情報管理

医療従事者への情報提供

治験業務 (治験薬管理)

1990-

病棟への業務展開
(分業の進展)

調剤・製剤・薬品管理

新しい調剤の定着

注射薬調剤

注射処方せんによる調剤

病棟業務

薬剤管理指導業務の導入

医薬品情報管理

患者への情報提供
医療従事者への情報提供

治験業務 (治験管理)

2000-

入院患者中心の業務

調剤・製剤・薬品管理

患者情報の把握
処方監査
服薬指導

注射薬調剤

注射処方せんによる調剤

一部IVH調製

病棟業務

薬剤管理指導業務の進展

医療事故・過誤防止

医薬品のリスクマネージャー

医薬品情報管理

患者及び医療従事者対象
根拠に基づく医療への貢献

薬物療法の個別化

TDM, 特殊製剤

病院経営への貢献

治験業務・臨床試験業務
治験管理

2007

入院患者中心の業務

調剤・製剤・薬品管理

患者情報の把握
処方監査
服薬指導

注射薬調剤

注射処方せんによる調剤
抗癌薬や重症患者への
無菌混合調製

外来化学療法注射薬混合

病棟業務

薬剤管理指導業務の定着
退院時指導
持参薬管理
チーム医療への貢献
薬薬連携
総合的薬学的管理

医療事故・過誤防止

医薬品のリスクマネージャー

医薬品情報管理

患者及び医象
根拠に基づく医療への
貢献

薬物療法の個別化

TDM, 特殊製剤

病院経営への貢献

治験業務・臨床試験業務

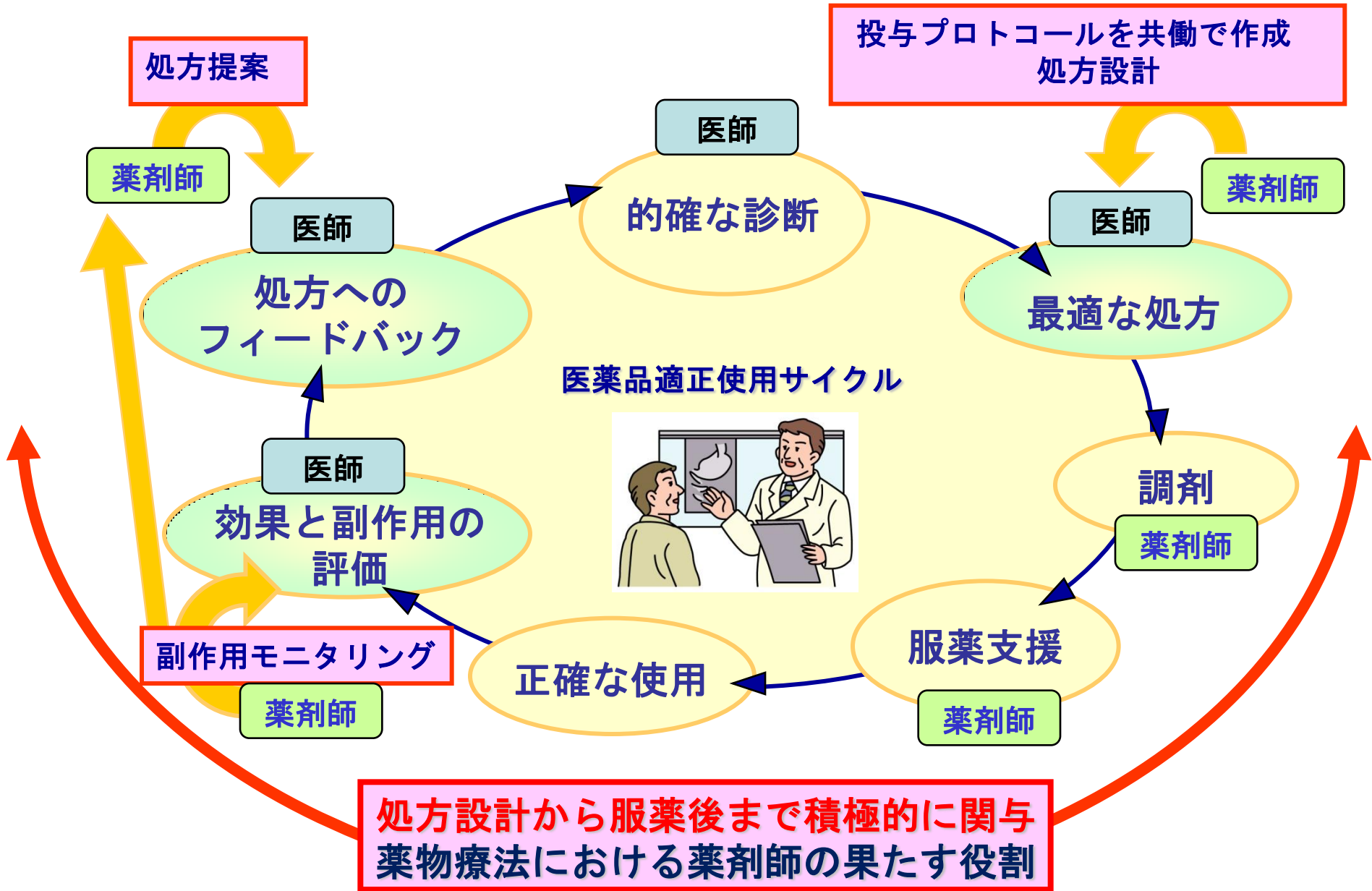
治験管理

治験コーディネーター

病院薬剤師業務の 種類・量・質の激変

受動的チーム医療から 能動的チーム医療へ

薬物療法における医師との協働



病棟常駐化が実現している病院の例 東住吉森本病院

病床数 329床
 薬剤師 20人

薬剤師は病棟に常駐（1995年～）
 現在2病棟3人体制

副担当がフオー
 主担当は病棟常駐



病棟常駐化により確保される薬剤業務

- **積極的な処方提案（患者情報を随時把握）**
- 持参薬を継続使用する時のリスク患者情報の収集・薬歴管理
- 薬効・副作用モニタリング（フィジカルアセスメント）
- **副作用状況の把握・薬学的管理**
- 他の医療スタッフへの助言・相談
- 医薬品プロトコル・マネジメント
- 継続的な治療管理

- 与薬やその準備
- 配薬（配薬を通じた状況把握・服薬指導）
- 注射薬の投与準備
- 点滴ライン等のルート管理

手術室における薬剤師の具体的な活動内容

安全な手術のためのチームの構成(医師・看護師等)

持参薬管理

一般病床

手術室

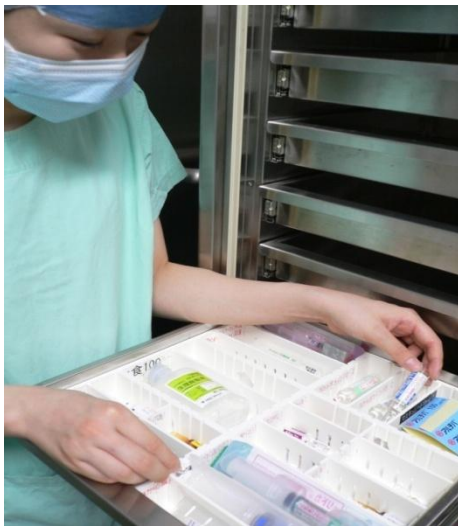
回復期病床・一般病床

術前投薬

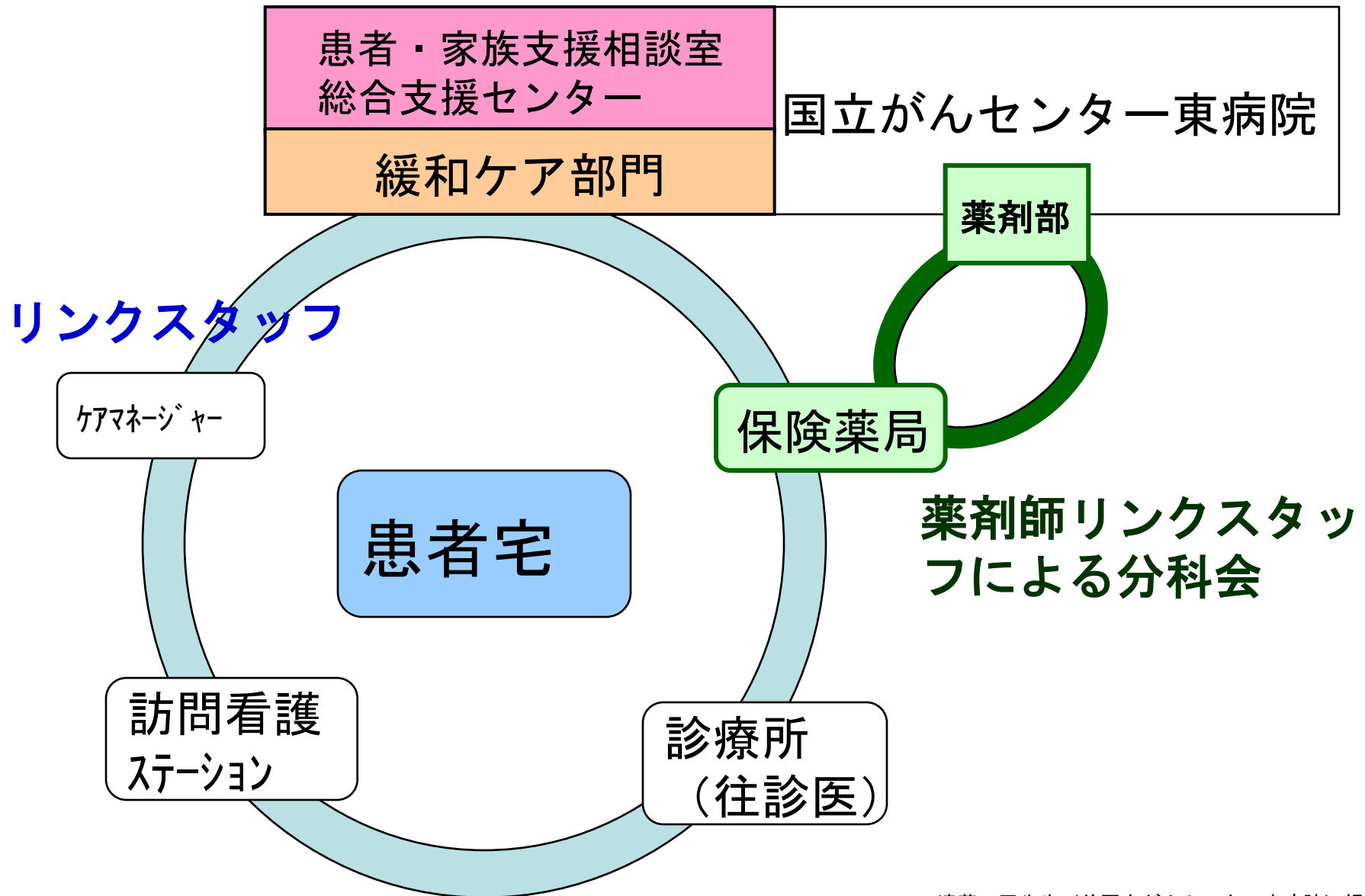
手術中の医薬品管理

術後の薬物治療への関与

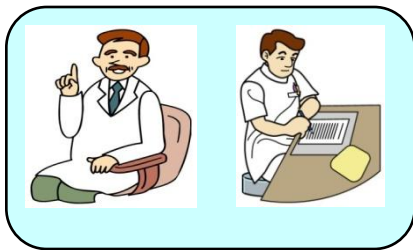
- ①麻薬・毒薬をはじめ手術部内すべての医薬品の管理（監査，発注，供給，充填）
- ②手術時使用薬剤のセット化
- ③注射剤混合調製
- ④麻酔記録の監査
- ⑤医療スタッフへの医薬品情報提供



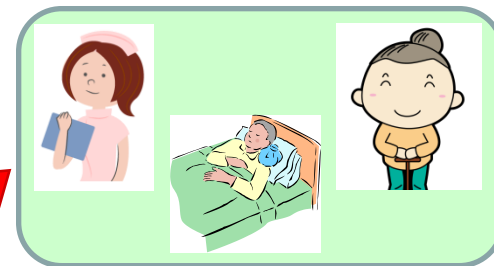
地域緩和ケアを支えるリンクスタッフ



終末期医療における薬剤師の役割



医師への助言



患者や患者家族等
への服薬指導

薬剤の特性を含む薬学的観点からの助言

相互作用のチェック
副作用のチェック

嚥下困難患者・認知機能低下患者への
剤形選択・調剤方法の工夫・補助手段
等の助言

輸液管理・栄養管理への処方支援
(ターミナルステージに応じた管理)

薬剤選択への助言

病院薬剤師

調剤室から病棟へ
緩和ケアチームへの参加
注射薬も含めた調剤へ (抗がん剤の混合調製)
外来化学療法への進展

⋮

薬薬連携

薬局薬剤師

医薬分業の進展・定着
在宅医療への参画
TPN, 無菌調製等を含む調剤へ
退院時カンファレンスへの参画

⋮

麻薬

厳格な使用制限から疼痛緩和の手段として積極的な使用推進へ

流通に対する規制緩和

製剤的工夫 (徐放性製剤, 外用薬 (坐剤, 貼付剤)) がなされた薬剤の開発された
ことによる薬剤選択の幅の増加

	モルヒネ系製剤	1981	2000	2008
注射	アンブル製剤	2	3	3
	キット製剤	0	0	2
内服	錠剤	1	4	7
	カプセル剤	0	3	9(3)
	散剤(原末)	3	3	3
	散剤(顆粒)	0	3	5(2)
外用	液剤	0	0	2
	坐剤	0	3	3

薬局薬剤師の業務変化

医薬分業の進展（地域医療におけるチーム医療への参画）

在宅医療への参画

麻薬・注射薬の取扱の増加

内服・外用の調剤のみならず T P N, 無菌調製を含む調剤も

薬剤選択への薬学的観点からの助言

用量のチェック

相互作用・副作用のチェック

嚥下困難患者・認知機能低下患者への剤形選択

調剤方法の工夫・補助手段への助言

輸液管理・栄養管理への処方支援

（ターミナルステージに応じた管理）

患者家族に対する薬剤情報提供

薬局薬剤師の退院時カンファレンスへの参画

入院中に実施された医療についての情報共有

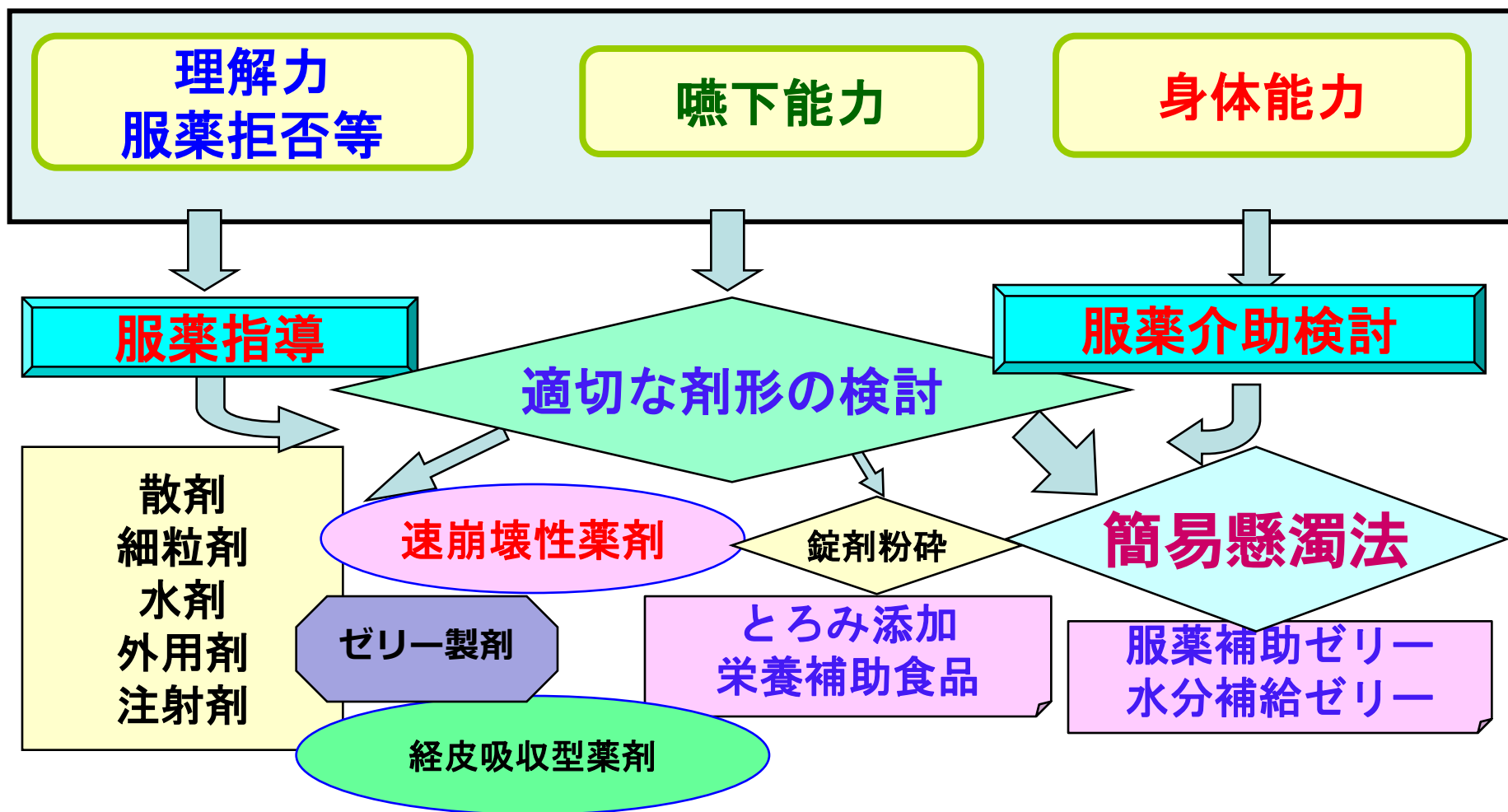
在宅医療支援に対する診療報酬上の評価

薬局薬剤師と病院薬剤師の情報共有のための連携

外来化学療法や複数医療機関からの指示情報等の共有, 共同の勉強会等

服薬に関する因子の評価と計画の流れ

実際に服薬の場面に参加し、患者様の服薬状況をより詳細に把握でき、評価と計画を行うことにより、適切な服用形態の選択へつなげることができる。



多職種連携によりアセスメント可能

食事

食欲
味覚
嚥下状態
口腔内清掃
口渇
吐き気
胃痛
など

排泄

尿の回数、出具合
便の回数、出具合
汗（状態）
など

睡眠

睡眠の質、時間
日中の傾眠
不眠の種類
など

運動

ふらつき
転倒
歩行状態
めまい
ふるえ
すくみ足
手指の状態
麻痺
など

これらのキーワードから患者の体調を定期的に
チェックし、薬剤の効果・副作用をアセスメントする

このほか認知領域や環境（独居、同居、施設、老老介護等）も把握

多職種連携の際の共有情報など

<訪問看護ステーションとの連携> (例：副作用管理)

薬剤師 → 看護師

医薬品情報の提供

薬剤訪問指導内容の共有

重篤副作用の説明

副作用チェックポイント説明

看護師 → 薬剤師

訪問時の副作用チェック

症状変化時の報告

薬の影響について相談

<介護職との連携> (ケアマネージャー等)

薬剤師 → ケアマネージャー

介護職訪問時の服薬介助、スケ

ジュール調整依頼

介護職訪問時の体調チェック(記録)依頼

薬剤訪問指導内容の共有

入院時における服薬情報の提供

ケアマネージャー → 薬剤師

ケアプランの情報共有

利用者情報の提供

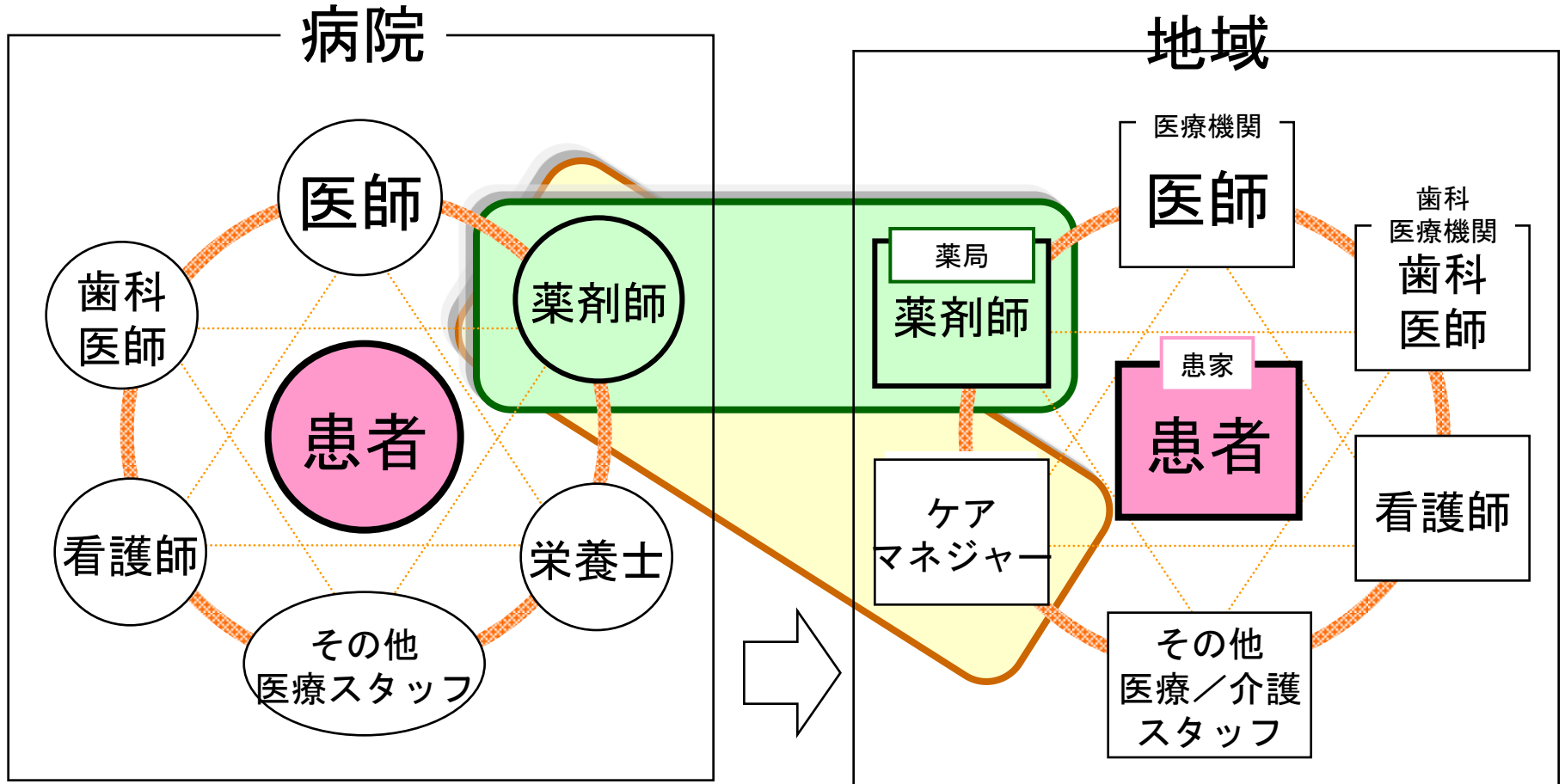
介護保険に係る情報提供

生活、経済状況等の背景

チーム医療の姿

<医療機関内の場合>

<在宅医療（地域医療）の場合>



安全で安心なシームレスな医療提供体制の確保